

Computer Report

Vol. 52 No. 5 5月号 (通巻 692号)

はじめの言葉

■相も変わらず情報システム開発における要求仕様のツメの作業が甘く、成果を出すのが難航しているようだ。まさに古くて新しい課題である。いわゆる開発作業の上流工程で、要求仕様のまとめができず、今も大いに苦戦しているのだ。その意味で、いつまで経っても進歩しない分野と言えるかもしれない。人間が介在する限り、将来的にも悩まされ続けるテーマだと覚悟すべきであろう。否、それを前提とすべきだろう。

■すでに 20 年余も前のことなので、昔流に言えば二昔以上、犬猫年齢ならぬ IT 世代年齢で言えば「むかしむかしの物語」となってしまうだろうが、当時、コンピュータ産業では新入のソフトウェア技術者をメインフレームベースで育成するか、流行りのパソコンベースで育成するかで議論が揺れ動いていると、IPA（当時の情報処理振興事業協会、現在の情報処理推進機構）の技術担当責任者から聞いたことがある。

■当時の新人ソフトウェア技術者育成論議のポイントは、即戦力にするならパソコンベース、長期的な大規模システム開発技術者の育成ならメインフレームベースということだった。しかし、即戦力で目先のデスクトップアプリケーションの開発をトレーニングさせると、日銭は稼げたとしても、将来的にパソコンベースの技術者はグループワークとしての大規模システム開発のプロジェクトに参加しにくくなると指摘されていた。

■一方、即戦力ではないが、メインフレームベースで育成された技術者は、息の長い技術者生命があるとされていた。実はその数年前から IPA が実施し、収集していた事情聴取調査では、そういう結論が出ていたのである。気の毒だが、パソコンベースの即戦力技術者は当時から「使い捨て」という発想があったのは否めない事実である。人生のやり直しをできないことを考えると、新人に対して大人たちは何とも酷い仕打ちをしていたものだ。

■それから 20 年余、当時のパソコン世代も 40 代半ば過ぎの脂の乗り切った世代になっている。のはずなのだが、耳にするのは冒頭述べた通り、上流工程における要求仕様定義のツメの甘さから、大規模情報システムの開発が思うにまかせていない話ばかり。官庁系あるいは大手金融機関向け、社会システム系といった大規模システム開発で頓挫している事例が目白押しである。まさに、この間における我が国の人材育成の成果が現れているのだ。

■そんな中、IPA はこのほど「非機能要求定義の活用における課題と対策をまとめた調査報告書」を公開している。直接的には、ユーザーが自覚して必要だと要求しない機能であっても、それを加味したシステム仕様定義をしておかないと、最終的に、ユーザーの期待するアプリケーション機能は達成されないという問題の提起である。これを、非機能要求定義とはよくも言ったもので、この表現の狡猾さだけには恐れ入る次第である。

■目先にあって、自分の気付いたことだけを全てだという発想で「もの作り（ソフトウェア開発）」をしてきた、これがこの間の我が国の技術者育成の現場だと言っているように思える。言われたことしかできない、頼まれたことしか実現しない、こういうソフトウェア技術者がほとんどだと言われている気がする。そういう人材に、言われなくてもしなくてはならないことがあることを教える。まさに至難の業としか言いようがない。（藤見）